

## 『湿地の文化と技術』北海道版インベントリーの作成に向けて

牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）、笹川孝一（法政大学）、辻井達一（日本国際湿地保全連合）、佐々木美貴（日本国際湿地保全連合）、名執芳博（日本国際湿地保全連合）、安藤元一（東京農大・農・野生動物）

「湿地の文化と技術」のナショナルインベントリーの整備を進める中で、ラムサールサイトをはじめとする湿地を日常的に守り活用している地元住民や団体にとっては、ローカルインベントリーに対するニーズが強く存在することが指摘されている。この度、北海道版のローカルインベントリーの作成に向けて着手したので、その経緯と成果を報告する。

### 1. 北海道版インベントリーの意義

北海道は国内のおよそ8割の湿原を有し、12のラムサールサイトを擁する湿地の宝庫である。道内ラムサールサイトの日常的な保全管理やCEPA活動に携わる自然系施設、NGO、市町村で構成される北海道ラムサールネットワークでは昨年、湿地の保全とワイズユースに関するアンケート調査及びセッションを開催したが、ラムサールサイトが抱える共通の課題が浮かびあがった一方で、各地における多様な取り組みが展開されていることが判明し、ローカルインベントリーに対する高いニーズと実践的な意義を感じさせた。道内にはラムサールサイト以外にも多くの湿地があり、多様な活動が展開されていることを考えると、そのニーズと意義は更に高いものと想像できる。また、北海道における「湿地の文化と技術」は、その独特な気候風土、あるいはアイヌ・開拓史といった中で、国内においても独自に培われた要素を多く有するものと考えられる。これらから、北海道における「湿地の文化と技術」のローカルインベントリーは大きな意義を持ち、その作成を効率的に進め、情報を活用する下地をも兼ね揃えていると言えるだろう。

### 2. 北海道版インベントリーの作成手順

基本的にはナショナルインベントリーの作成に用いた「インベントリー作業シート」を関係者に記入してもらうことで行う。この際、ナショナルインベントリーをまとめた「湿地の文化30選」、また、事前にとりまとめた宮島沼と石狩湿原の事例を提示することで、幅広く多様な価値観に基づいた記入を促すことができると考えられる。

作業シートは、まず道内ラムサール関係者に記入してもらい、北海道ラムサールネットワークの総会と併せて開催されるワークショップにて取りまとめを行う。その後、取りまとめ結果に基づいて、より広い観点と地域からの事例を集めるため、ラムサールサイト以外の湿地関係者、博物館や郷土資料館等の施設関係者等にも聞き取りを進める。

なお、本発表では、宮島沼と石狩湿原に関するインベントリーと各ラムサール湿地において整理した湿地の文化と技術一覧をもとに、北海道独特の事例について報告する。